

大学生のダンス授業におけるフロー感覚と ダンス発表会参加の関連

— 「現代的なリズムのダンス」を対象として —

内 山 須美子¹

Relationships Between the Sense of Flow and Participation in Recitals in Dance Classes for University Students: Subjects for “Modern Rhythm Dance”

Sumiko Uchiyama¹

The purpose of this research was to predict from experiences in flow, participation in dance recitals by university students who had had no experience in dance to that point, and to clarify the factors in promoting participation in dance after college life and graduating from university. Specifically, it was intended to construct and examine a model of experience in flow in dance classes that would influence and promote later participation in dance activities. As a result, with flow experience, a model that influenced later participation in dance activities in learners leading to good adaptation was obtained. From this, when teaching dance, the importance of having feeling of enjoyment in dance itself without worrying about others watching them, of having clear aims from clear feedback, and of producing a balance between one's level of challenge and one's skills was shown.

¹ 白鷗大学教育学部

Faculty of Education, Hakuoh University

1. はじめに

昭和52年の指導要領改訂では、「運動の楽しさを味わわせる」という目標のもと、生涯に亘ってスポーツを実践することの意義が唱道され、「楽しさ」の体験の累積によって運動への志向性が形成され運動への継続的参加を促すことが喚起された。体育授業は生涯スポーツ実践の基盤として重要な役割を担うものでなければならない。しかしながら、その後のダンス活動参加を促すダンス授業の要因についての研究は見当たらない。そこで、本研究は、ダンス授業を受講した大学生を対象に、彼らの授業外で行われるダンス発表会参加をフロー感覚から予測し、ダンス活動に参加する要因の因果関係を検討する。

「フロー」という概念は、「全人的行為に没入している時に人が感ずる包括的感覚」²⁾と定義されており、創造的な仕事には欠かせない内発的動機づけである。このような背景から、フロー理論の教育分野における可能性とその有用性が指摘されてきた。我が国においても、フロー感覚がダンスの学習意欲に影響を及ぼすことが報告されている⁵⁾。

内発的動機づけを説明するフローモデルをダンス授業において検証することはダンス指導への応用に有用な知見を提示する意義があると考ええる。そこで、本研究の目的は、それまでダンス経験のない大学生のダンス発表会参加をフロー体験から予測し、大学生生活と大学卒業後のダンス参加を促進する要因を明らかにすることとした。具体的には、ダンス授業におけるフロー体験は学習者のその後のダンス活動への参加に影響を及ぼすと仮定するモデルを構築して検討することを目的とした。

2. 方法

2.1. 調査対象と調査方法

平成23年度H大学教育学部「ダンスⅠ」受講生116名に対し、授業担当者

(ダンス教授歴25年)を介して調査票を配布し、調査の趣旨や個人情報の保護について説明し、調査の同意を求めた後、回答は記名式で行われた。実施時間は10分程度であり、回答終了後、担当者によって回収された。経験の有無や経験年数など、ダンスの学習意欲は、学習動機以外の要素が大きく関与していることが予想されるので、授業以外(ダンス部活動・スタジオレッスン等)のダンス経験者4名は対象から除外した。「現代的なリズムのダンス」の学習経験のない受講生112名のうち、回答に欠損値がみられた6名(男性5名、女性1名)を分析から除外した。よって、分析対象者は106名(男性64名、女性42名)となった。なお、欠損値の発生パターンには特別な規則性はみられず、質問内容が被調査者の反応を何らかの方向に歪めたという可能性は低く、単なる記入漏れによるものと考えられる。

2.2. 調査時期

平成23年5月9・10日：フロー調査

6月6・7日：フロー調査

7月4・5日：フロー調査・ダンス発表会参加意識調査

2.3. 調査授業

平成23年度「ダンスⅡ」全15回の授業のうちの第5回目、第9回目、第13回目授業である。授業の内容は次の通りである。

- ① 授業の単元指導計画(資料1参照)
- ② モデル授業の構成(資料2参照)
- ③ モデル授業で使用した運動内容(資料3参照)

2.4. 調査内容

1) フローに関する項目

尺度に関しては、Jackson, S.A. & Marsh, H.W. (1996) が作成したFSS (Flow State Scale)³⁾を基に、川端と張本(2000)によって日本語に訳され

たフローに関する36項目⁴⁾から18項目を参考に作成した。質問文は「あなたの気持ちは次のうちどれに当てはまりますか」というものであった。回答方法は「全く当てはまらない(1)」から「非常に当てはまる(5)」の5段階で評定するよう求めた。なお、フロー18項目は表1のように再分類できる。分析には、この再分類も用いた。

表1. フローに関する項目の分類
(表中の項目番号は質問項目の番号である)

再分類番号	因子名	項 目
1	自己目的的経験	1) 10)
2	最適水準	2) 9)
3	集中感	3) 22)
4	自意識の喪失	4) 8)
5	時間感覚の変容	5) 20)
6	明確な目標	6) 18)
7	即座のフィードバック	7) 28)
8	コントロール感	11) 13)
9	動きの自動化	16) 17)

2) ダンスの参加意思に関する項目

平成23年度開催のH大学ダンス発表会に参加するかどうかについて、「参加したくない(1)」から「とても参加したい(5)」までの5段階で評定するよう求めた。質問文は「ダンス発表会への参加について、あなたの気持ちは次のうちどれに当てはまりますか」であった。加えて、実際に参加した者に6点、23年度以降の発表会にも継続して参加している者に7点を与えた。なお、H大学ダンス発表会は授業(単位取得、成績)とは全く関係がなく、自由意思で参加するものである。発表会は平成23年12月末に開催された。

2.5. 結果の処理

回収率と有効回答率は、第1回目、2回目、3回目授業共に100%であった。調査データに対しては次の手順で解析を行った。

- (1) フローの36項目に対し、「非常にあてはまる」を5点、「全くあてはまらない」を1点として、5段階の選択肢を得点に変換し、各項目、調査日ごとに平均と分散を求める。
- (2) ダンス発表会参加の項目に対し、「継続参加」を7点、「参加したくない」を1点として、7段階の選択肢を得点に変換し、平均と分散を求める。
- (3) データを男女別、クラス別に分類し、性差およびクラス間差の有無を検証する。
- (4) 3回の授業のフロー下位尺度の平均と分散を求める。
- (5) (4)の結果を用いて、フロー感覚と発表会参加との関連を検証する。

2.6. 統計解析方法

本研究の分析は、確認的因子分析およびパス解析によって行われた。両分析におけるパラメータの推定法には最尤法を用いた。また、モデルの推定値には標準解を示した。モデルの全体的評価については、モデル適合度指標であるGFI (Goodness of fit index)、AGFI (Adjusted Goodness of fit index)、CFI (Comparative fit index)、RMSEA (Root mean square error of approximation)を用いた。モデルの部分的評価については、モデル内のパス係数および相関関係の有意性を示すCR「Critical Ration」を用いた。モデルの修正には、モデル修正指標を手掛かりとした。以上の統計解析にはSPSS19.0J for WindowsおよびAMOS19.0Jを使用した。

3. 結果

3.1. 質問項目の分析

1) フローに関する項目

各回の授業のフロー得点の平均値と標準偏差および3回の授業の平均値と標準偏差を表2に示す。

表2. フロー得点の平均値と標準偏差 (n=106)

質問項目	平均値			標準偏差			平均値	標準偏差
	第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回		
(1)フィーリングが素晴らしく、また味わってみたい	4.38	4.28	4.41	0.61	0.66	0.64	4.36	0.57
(2)難しい振付でも対応するだけの技能をもっていた	3.31	3.20	3.35	1.00	1.01	0.86	3.29	0.83
(3)私は集中していた	4.33	4.29	4.42	0.80	0.84	0.63	4.35	0.61
(4)他人が自分をどう思っているのか心配することはなかった	3.62	3.63	3.81	1.13	1.08	0.99	3.69	0.93
(5)時間の過ぎ方がいつもと違うように感じられた	4.25	4.17	4.22	0.92	0.89	0.93	4.21	0.80
(6)自分のなすべきことは何かわかっていました	3.99	3.93	4.01	0.90	0.86	0.83	3.98	0.79
(7)どうすれば上手にいくかわかっていた	3.40	3.29	3.49	1.02	1.00	0.97	3.39	0.91
(8)他人が私をどう思っているかなどは気にならなかった	3.59	3.58	3.78	1.10	1.07	1.00	3.65	0.90
(9)私の技能と、その時に必要な技能は高いレベルでつり合っていた	3.24	3.26	3.40	1.07	1.09	1.00	3.30	0.89
(10)とても楽しい経験であった	4.72	4.67	4.71	0.53	0.61	0.60	4.70	0.51
(11)全てを支配しているような感覚だった	2.39	2.44	2.65	1.13	1.20	1.14	2.49	1.01
(13)行っていることは全て、自分でコントロールしていると感じていた	2.94	3.01	3.02	1.09	1.09	1.04	2.99	0.95
(16)考えなくても自然に正しい動きができた	2.92	2.91	3.29	1.06	1.06	1.12	3.04	0.92
(17)考えることなく、無意識的、自動的に動いていた	3.07	3.03	3.30	1.15	1.15	1.09	3.13	0.98
(18)なすべき目標ははっきりしていた	3.97	4.03	4.12	0.80	0.82	0.81	4.04	0.71
(20)時間が遅くなったり速くなったり、変化しているように感じた	3.40	3.46	3.58	1.14	1.06	1.16	3.48	0.96
(22)努力しなくても行っていることに集中できた	3.42	3.36	3.49	1.11	1.13	1.00	3.42	0.95
(28)自分が上手くてできていることはわかっていました	2.70	2.63	2.91	1.04	1.03	0.96	2.75	0.87

2) ダンス発表会への参加意思に関する項目

ダンス発表会への参加意思のデータ構成を表3に示す。

表3. ダンス発表会への参加意思 (n=106)

	度数	パーセント
参加したくない	3	2.8
あまり参加したくない	20	18.9
どちらでもない	8	7.5
参加したい	16	15.1
とても参加したい	19	17.9
実際に参加した	38	35.8
継続参加	2	1.9
合計	106	100.0

3) フロー 18項目への確認的因子分析

フローの下位尺度である18項目で構成される因子モデルについて確認的因子分析を行った。9つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、すべての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行ったところ、モデル適合度指数は、GFI=.892、AGFI=.856、CFI=.938、RMSEA=.068であった。また、潜在変数から観測変数へのパス係数は、全て有意 ($p<.05$) で、中程度以上の正の値が示された。以上のことは、やや改善の余地はあるものの、18項目で構成されるフローの因子モデルが妥当であることを示している。表4にこの最終的なモデルの分析結果を示す。

表 4. フロー 18項目の確認的因子分析結果 (標準化推定値)

	明確な フィード バック	自意識 の喪失	最適水準	自己目的 的経験	動きの 自動化	時間感覚 の変容	支配感	集中感	明確な 目標
(7)どうすれば上手にいくかわかっていた	.58								
28自分が上手くできていることは分かっていた	.49								
(4)他人が自分をどう思っているのか心配することはなかった		.83							
(8)他人が私をどう思っているかなどは気にならなかった		.79							
(2)難しい振付でも対応するだけの技能をもっていた			.80						
(9)私の技能と、その時に必要な技能は高いレベルで つり合っていた			.45						
(1)フィーリングが素晴らしい、また味わってみたい				.81					
00とても楽しい経験であった				.62					
06考えなくても自然に正しい動きができた					.89				
07考えることなく、無意識的、自動的に動いていた					.79				
20時間が遅くなったたり早くなったり、変化している ように感じた						.79			
(5)時間の過ぎ方がいつもと違うように感じられた						.36			
01全てを支配しているような感覚だった							.73		
03行っていることは全て、自分でコントロールして いると感じていた							.84		
(3)私は集中していた								.54	
22努力しなくても行っていることに集中できた								.48	
08なすべき目標ははっきりしていた									.55
(6)自分のなすべきことは何かわかっていた									.66

確認的因子分析によって因子構造が確認された尺度とダンス発表会への参加意思の得点について、平均値、標準偏差、相関行列を表5に示す。また、各尺度の信頼性として、 α 係数を算出し内的整合性を確認したところ、明確なフィードバックは、 $\alpha = .825$ 、自意識の喪失は、 $\alpha = .860$ 、最適水準は、 $\alpha = .851$ 、自己目的的经验は、 $\alpha = .876$ 、動きの自動化は、 $\alpha = .870$ 、時間感覚の変容は、 $\alpha = .822$ 、支配感、 $\alpha = .875$ 、集中感、 $\alpha = .683$ 、明確な目標は、 $\alpha = .813$ であった。集中感については.70を若干下回ったが、全体的にはほぼ満足できる水準であった。結果を表6に示す。

表 5. 尺度の記述統計と尺度間の相関行列

	平均値	標準 偏差	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 自己目的的経験	4.49	.55	—									
2. 最適水準	3.19	.76	.43 **	—								
3. 集中感	3.65	.74	.50 *	.49 **	—							
4. 自意識の喪失	3.51	.70	.76 **	.56 **	.36 **	—						
5. 時間感覚の変容	3.84	.69	.56 **	.42 **	.32 **	.65 **	—					
6. 明確な目標	4.03	.66	.41 **	.56 **	.32 **	.48 **	.41 **	—				
7. 明確なフィードバック	2.91	.78	.50 **	.78 **	.48 **	.59 **	.43 **	.53 **	—			
8. 支配感	3.68	.75	.74 **	.51 **	.37 **	.93 **	.62 **	.43 **	.55 **	—		
9. 動きの自動化	3.09	.89	.29 **	.92 **	.43 **	.52 **	.41 **	.48 **	.71 **	.46 **	—	
10. 参加意思	4.03	1.61	.56 **	.64 **	.37 **	.42 **	.59 **	.47 **	.64 **	.44 **	.32 **	—

* $p < .05$ ** $p < .01$

表 6. 信頼性分析 (Cronbachの α) 結果

因子名	Cronbach のアルファ	項目の数
明確なフィードバック	0.825	2
自意識の喪失	0.860	2
最適水準	0.851	2
自己目的的経験	0.876	2
動きの自動化	0.870	2
時間感覚の変容	0.822	2
支配感	0.875	2
集中感	0.683	2
明確な目標	0.813	2

尺度間の相関では、フロー 9 因子にそれぞれ中程度の正の相関が示された。参加意思と 9 因子それぞれに中程度の正の相関が示された。以上の関係から「フロー感覚→発表会への参加意思」というモデルを仮定し解析を行った。なお、男女差の検討を行うために、フローの下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、すべての下位尺度において男女の得点差は有意ではなかった。クラス間差の検討を行うために、フローの下位尺度得点について F 検定を行った。その結果、すべての下位尺度においてクラス間の得点差は有意ではなかった。

3. 2. パス解析

明確なフィードバック、自己意識の喪失、最適水準、自己目的的经验、動きの自動化は、時間感覚の変容、支配感、集中感、明確な目標、ダンス発表会参加意思という10の潜在変数で構成されるモデルを構築し、モデル修正指標により最良モデルを検討した結果、モデルの適合度指数は、GFI=.920、AGFI=.900、CFI=.969、RMSEA=.042となり、高い適合度が示された。変数間のパス係数は図べて統計的に有意 ($p<.05$) で正の値が示された。以上のことは、このモデルが妥当なことを示している。最終的なモデルを図1に示す。

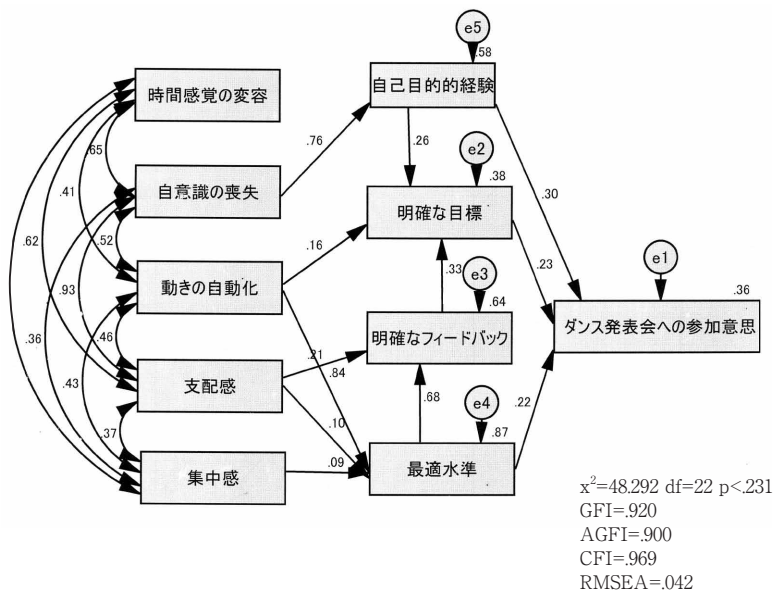


図1. パス解析の結果

4. 考察

フロー体験からダンス発表会参加意思への予測について、参加意思は自己目的経験、明確な目標、最適水準から予測されたが、その他6因子からは予測されなかった。これは、自己目的経験、明確な目標、最適水準が、ダンス発表会参加意思を充足する要因になることを示唆している。一方、その他の6因子は、直接的にはダンス発表会の参加意思に影響を及ぼす要因にならないことが示唆された。従って、その後のダンス活動参加への有効性を考えた場合、ダンス授業において、ダンス自体が楽しいという気持ちを持つこと、明確な目標が持てること、挑戦水準と技能の釣り合いがとれていることが重要となると考えられる。

自己目的経験に強く影響を及ぼすのは、自意識の喪失であることから、ダンスが楽しいという気持ちを持たせるためには、他者の目を気にすることがないことが前提となる。自己呈示の失敗による恥ずかしさは有能感の低い学習者に多いことも認められている⁶⁾。授業で使用する運動内容には初心者でも行える簡単なものを選択すべきである。また、自意識の喪失と動きの自動化の間には正の相関が認められるので、その技やステップが自動化するまでの練習時間を豊富にとることが大切となる。

明確な目標に影響を及ぼすのは明確なフィードバックと動きの自動化である。また、明確なフィードバックに影響を及ぼすのは最適水準である。これらのことから、明確な目標を認知できるには、挑戦課題と技能が釣り合っていること、動きが自動化してスムーズに動いているというフィードバックが持てることが前提となる。

最適水準の知覚に影響を及ぼしているのは、動きの自動化、支配感、集中感であることから、挑戦課題の水準と自己の技能が釣り合っていると感じられるには、動きが自動化して恥ずかしさを取り除き、課題に集中できる環境づくりが重要である。

浅川¹⁾は、人がテレビゲームに夢中になるのは、「非常に簡単なレベル

からスタートし、プレイヤーの能力が向上すれば、むずかしさのレベルも随時上昇するように設定されている」「目標がきわめて明確である」「評価情報は得点として瞬時に確認できる」ことを理由に挙げている。このことから、効果的なe-Learningの実現には「(1) 取り組む課題の目的・目標を学習者が確実に理解できる、(2) 学習者一人ひとりが自分の能力に合った最適レベルの課題に取り組むことができる、(3) 自分がどのようにその課題をこなしているのかを学習者自身が瞬時に確認できること、といった条件を備えたシステムを構築すること」が必要であると述べている。これは、フローを体験させるダンスの授業においても、そのまま援用することができるだろう。「最適水準」「明確な目標」「即座のフィードバック」という、「フローの生起条件」に基づきフローを享受できる環境とシステムを構築することができれば、学習者はフローのダイナミズムの中でダンスを楽しみながら、習得すべき知識や技能を高め、深めていくことができ、そのことが授業後のダンス活動参加に有効的であることが理解できるだろう。

フロー感覚からダンス発表会参加の予測について、大学生のダンス発表会参加は、ダンス授業におけるフロー感覚によって予測された。フロー感覚はダンス活動意図の予測変数となり、ダンス継続の要因として有効である可能性が示された。しかしながら、性別の割合からすると、男子が60.38%、女子が39.62%であり、やや男子の傾向が反映されている可能性が考えられる。今後は、性別の割合を考慮するとともに、性差についても検討していく必要がある。

本研究の結果から、ダンス指導への応用について考えてみると、自己目的的な楽しさ、明確な目標、最適水準と即座の評価が感じられる授業を展開していくことが望まれる。また、それを実現するため、具体的には、自動化するまでの練習時間を豊富にとること、恥ずかしさを取り除くこと、課題に集中できる環境づくりを重要視した指導を展開することである。しかしながら、フロー感覚とは、個人によって知覚される要因であるため、実際の指導場面においては、学習者一人ひとりが、明確な目標や最適水準、

ダンス自体の楽しさを感じられているかどうかを、教師が読み取れることも非常に重要となる。本研究の限界は、大学内のダンス発表会を対象に研究を行ったことである。今後は、卒業した後のダンス活動参加を把握することや追跡調査の協力を得ることである。今後、縦断研究により、信憑性の高いデータを提示していく試みが必要であろうと思われる。

5. 結論

本研究の目的は、それまでダンス経験のない大学生のダンス発表会参加をフロー体験から予測し、大学生生活と大学卒業後のダンス参加を促進する要因を明らかにすることであった。具体的には、ダンス授業におけるフロー体験は学習者のその後のダンス活動への参加に影響を及ぼすと仮定するモデルを構築して検討することを目的とした。その結果、フロー体験は学習者のその後のダンス活動への参加に影響するというモデルは良好な適合度を得られた。このことから、ダンスの授業をする際には、他者の目を気にすることなくダンス自体が楽しいという気持ちを持つこと、明確なフィードバックにより明確な目標が持てること、挑戦水準と技能の釣り合いがとれていることの重要性が示された。

参考引用文献

1. 浅川希洋志 (2009) 効果的 e-Learningのためのフロー理論の応用. JeLA会誌 9. 4-9.
2. チクセントミハイ, M.: 今村浩明訳 (2000) 楽しみの社会学. 世界思想社: 東京 p.66.
Csikszentmihalyi, M. (1975) Beyond boredom and anxiety. Jossey-Bass: San Francisco
3. Jackson, S.U. & Marsh, H.W. "Development and Validation of a Scale to Measure Optimal Experience: The Flow State Scale" Journal of Sport & Exercise Psychology. 1966.18.17-35.
4. 川端雅人・張本文昭 (2000) 体育授業におけるフロー経験—Flow State Scaleを用いて—. 東京電機大学理工学部紀要22: pp.19-27.
5. 内山須美子 (2011) 「現代的なリズムのダンス」の学習意欲と学習成果に関する研究: 内発的動機づけとしてのフロー感覚との相関. 白鷗大学論集26(1). pp.173-209
6. 内山須美子・奥山美希・松尾健太 (2013) ダンス学習の動機づけに関するテキストマイニング分析～中学生の「現代的なリズムのダンス」の授業を事例として～. 白鷗大学教育学部論集 7 (1). pp.173-209

大学生のダンス授業におけるフロー感覚とダンス発表会参加の関連

資料 1

単 元 指 導 計 画									
【単 元 名】 現代的なリズムのダンス									
【指導学年】 第1学年									
【単元目標】									
(1)自己の能力に適した課題を選択し、課題解決に向けて、意欲的・計画的に取り組むことができる。									
(2)適切な課題に基づき、安全に配慮し、資料の活用や学習の進め方を工夫して課題解決を図ることができる。									
(3)自己の能力に適した課題を解決し、能力等に応じた技能を身に付け、ダンスの楽しさや喜びを味わうことができる。									
(4)ダンスの特性や意義を理解し、練習の仕方を工夫して安全に運動することができる。									
時間	ねらい 学習内容	評価の重点				具体的な評価基準		教師の支援と留意事項	評価の方法
		関心	思考	技術	知識	十分満足(A)	おおむね満足(B)		
1	1. オリエンテーション ・学習内容の説明 ・学習の目標を知る ・学習の進め方を知る ・グループ構成	○		◎		・自分の能力にあった課題に対して意欲的・計画的に取り組むことができる。 ・技術やコンビネーションの発展性や系統性がわかり、練習計画が立てられる。	・自分の能力にあった課題に対して意欲的に取り組もうとしている。 ・ダンスの楽しさや学習の進め方がわかる。	・学習内容を確認及び把握させる。 ・見通しを持った学習計画が立てられるようにする。 ・安全な練習の必要性、方法を理解させる。	活動の観察 学習ノート
2 5	2. 技術とコンビネーションの習得 ～ ロックダンス	◎	◎	◎	◎	・仲間と協力して教えあったりし、進んで授業に参加している。 ・学習ノートを工夫して活用することができる。 ・課題に対する練習の仕方を工夫することができる。 ・新しい技術やコンビネーションに挑戦し、努力することができる。	・仲間と協力して楽しく授業に参加している。 ・学習ノートを活用することができる。 ・課題に対する練習の仕方がわかる。 ・新しい技術やコンビネーションに挑戦しようとしている。	・自己の能力に応じたか愛を設定することができるようにする。 ・学習活動が円滑に進められるように、適切なリーダーの選出と役割分担をさせる。 ・能力や体力を配慮し、できる限りの努力をさせる。 ・3回の授業毎に技能テストを行い、自分の成果を確認させる。	活動の観察 学習ノート
6 9	2. 技術とコンビネーションの習得 ～ ヒップホップダンス	◎	◎	◎	◎	・仲間と協力して教えあったりし、進んで授業に参加している。 ・学習ノートを工夫して活用することができる。 ・課題に対する練習の仕方を工夫することができる。 ・新しい技術やコンビネーションに挑戦し、努力することができる。	・仲間と協力して楽しく授業に参加している。 ・学習ノートを活用することができる。 ・課題に対する練習の仕方がわかる。 ・新しい技術やコンビネーションに挑戦しようとしている。	・自己の能力に応じたか愛を設定することができるようにする。 ・学習活動が円滑に進められるように、適切なリーダーの選出と役割分担をさせる。 ・能力や体力を配慮し、できる限りの努力をさせる。 ・3回の授業毎に技能テストを行い、自分の成果を確認させる。	
10 13	2. 技術とコンビネーションの習得 ～ チャダンス	◎	◎	○	○	・仲間と協力して教えあったりし、進んで授業に参加している。 ・学習ノートを工夫して活用することができる。 ・課題に対する練習の仕方を工夫することができる。 ・新しい技術やコンビネーションに挑戦し、努力することができる。	・仲間と協力して楽しく授業に参加している。 ・学習ノートを活用することができる。 ・課題に対する練習の仕方がわかる。 ・新しい技術やコンビネーションに挑戦しようとしている。	・自己の能力に応じたか愛を設定することができるようにする。 ・学習活動が円滑に進められるように、適切なリーダーの選出と役割分担をさせる。 ・能力や体力を配慮し、できる限りの努力をさせる。 ・3回の授業毎に技能テストを行い、自分の成果を確認させる。	活動の観察 学習ノート
14	5. 発表会に向けての練習		◎	○		・発表会に向けてより楽しい作品になるように工夫することができる。 ・作品のできばえの確かめ方がわかり、その方法を友達に教えることができる。	・発表会に向けて練習することができる。 ・作品のできばえの確かめ方がわかる。	・制作した作品のできばえについて問題点を指摘し、あって課題解決を図らせる。 ・各グループ間を巡回し、課題解決に向けて個人・リーダー・グループに適切な指導を心がける。	活動の観察
15	6. 発表会					・お互いの演技を見て演技の評価やアドバイスをできる。 ・自分の能力に合った課題に対して達成の喜びを味わうことができる。	・お互いの演技を見て演技の評価ができる。 ・自分の能力に合った課題に対して達成の喜びを味わおうとしている。	・発表会の意義を理解させ、励ましあい、できる範囲で精一杯行わせる。 ・毎時間学習ノートに反省や次の時間の目標などを記入させる。	学習ノート

資料2

授業の構成				
授業の展開：5・9・13時間目／15時間	学習活動	生徒への支援	評価	時間
・本時のねらいや学習内容を理解できる。	1. 挨拶・健康観察をする。	・健康状態を把握し、見学者への助言をする。		10分
	2. 準備運動をする。	・身体各部分を、最低でも15秒間ずつストレッチをするよう助言する。		
	3. 本時のねらいと課題の確認をする。	・本時の見通しを立て、練習方法の確認ができるよう助言する。	・課題を見つけた授業の見直しを持ったか。(関心・意欲・態度)	
・習得した技術が安定した動作でできる。	4. 本時のコンビネーションで使用する技術を学ぶ。	・ゆっくりでもいいので丁寧にすることを助言する。	・資料の活用や学習の進め方を工夫することができたか。(思考・判断)	15分
・練習方法や場を工夫できる。	・手本を見て5～6回ずつ繰り返して確認する。	※学習ノートを参考にしながらアドバイスができるよう助言する。	・課題を発見し、課題解決に向けて取り組めたか。(思考・判断)	
	・グループ内で互いにアドバイスしながら行う。		・互いに教えあうことによって技術を理解することができたか。(技能)	
・習得したコンビネーションが安定してできる。	5. 本時で使用する音楽にあわせたコンビネーションを学ぶ。	・ゆっくりでもいいので丁寧にすることを助言する。	・資料の活用や学習の進め方を工夫することができたか。(思考・判断)	30分
・新たな課題を解決できる。	・手本を見て5～6回ずつ繰り返して確認する。	※学習ノートを参考にしながらアドバイスができるよう助言する。	・課題を発見し、課題解決に向けて取り組めたか。(思考・判断)	
	・グループ内で互いにアドバイスしながら行う。		・互いに教えあうことによってコンビネーションを理解することができたか。(技能)	
・習得したコンビネーションが音楽に合わせてできる。	6. 音楽にあわせて踊ることを習得する。	・ゆっくりでもいいのでグループ内のできばえに合わせて徐々に曲のスピードを上げていくよう助言する。	・課題を発見し、課題解決に向けて取り組めたか。(思考・判断)	15分
・新たな課題を解決できる。	・自分達の能力に合わせて課題を設定して、練習を行う。		・互いに教えあうことによって音楽に合わせて踊ることができたか。(技能)	
	・グループ内でアドバイスしながら行う。			
・恥ずかしがらずに発表できる。	7. 発表する。	・自分達の能力に合わせたスピードで発表するよう助言する。	・恥ずかしがらずに精一杯発表できたか。(関心・意欲・態度)	10分
		・恥ずかしがらずに、精一杯行うよう助言する。	・本時の教材である技術やコンビネーションは適切に習得されたか。(技能)	
		・発表時に他の班に観てもらいたいポイントをグループ内で話し合っておくよう助言する。		
・本時の学習を反省し、次時の課題を発見できる。	8. 本時の反省と評価を行い、次時への課題を発見する。	※本時の活動で良かった点や頑張った点などを認め合い、次時への意欲を持たせる。	・本時の活動について反省し、次時への目標を持ったか。(関心・意欲・態度)	10分
	9. 後片付けをする。			
	10. 健康観察・挨拶をする。			

資料3

授業で使ったステップと技		
チアダンス	ヒップホップ	ロックダンス
○使用したステップと技	○使用したステップと技	○使用したステップと技
★アームモーション ・ダイアゴナル	・ボックス	・ロック
・ハイブイ ・タッチダウン	・グループバインステップ	・ファンキーチキン
・ローブイ ・ロータッチダウン	・サイドステップ	・スキータ
▽＆ハーフT ・エル	・スケート	・スクーバ
★キック ・フロント ・サイド	・ニュージャックスイング	・ファンキージャンプ
★ジャンプ ・フライアウェイ ・トータッチ	・ポップコーン(縦・横)	・ドリル
★ターン ・シングルピルエット	・クロスステップ	・シルバードラマー
★シャッセル ★バトマン	・クロスターン	・クロスハンド